

# Not は一体何なのか？

—nowiht, noht, not— 英語の語源と由来

菅 沼 惇

## 目 次

1. 現代英語の否定文
2. 古期英語の否定文
3. notは一体何なのか？
4. 中期英語以降で
5. まとめと鳥瞰

### 1. 現代英語の否定文

現代英語で「否定」を表現する場合、否定表現といっても諸種あるが、普通の場合次の用例の通りに 'not' という否定語を使ったものである。

- (1)<sup>1)</sup> a. I don't know.  
 b. Tom is not wrong.  
 c. He did not see it.

そしてそれらを一応まとめておくと次のパターンになる。

$$(2) \quad S + \left\{ \begin{array}{l} \text{be} \\ \text{do} \\ \text{Modal Aux} \end{array} \right\} + \text{not} + X^{2)}$$

また、その外の否定語には次のものがある。

- (3)<sup>3)</sup> a. There is no man in the house.  
 b. None of them are my friends.  
 c. I never saw it.

注1), 3) これらの用例文は著者がそれとなく思いついたもので、しかもなるべくより単純なものにしたものである。

2) XはVをも含みうるvariablesのことである。

そして又まだその外にも否定を含蓄するような語・辞もあるが、それらはここでは関与しない。

## 2. 古期英語の否定文

### A) 普通の否定文

アングロサクソン時代には否定文というものはどのように作られていたのかというと、普通のやり方では述語動詞の前に ‘ne’ という否定語を置いて作っていた。次の用例の通りである。

(4) a. swa heo ne gecyrde ongean to him. *Genesis* VIII-12

(=so she did not return again to him.)<sup>4)</sup>

b. ⁊ he eow ne gehyrð, *Exodus* VII-4

(=and he does not hear you.)

c. ⁊ ðu neoldest hine forlætan; *Exodus* IV-23

(=and thou would not let him go;)

それらを一応まとめてパターン化すると次のようになる。

(5) S + ne + V + X

そのように当初英語は否定文を作る場合助動詞 ‘do’ の助けを要しなかったのである。

そしてまた、先の(1)や(2)の否定語 ‘not’ とこの(4)や(5)の否定語 ‘ne’ の差、果して一体この ‘not’ なるものは何なのであろうか？

### B) 多重否定文——又は補強表現

上のように、‘ne’ が述語動詞の前に置かれる否定文が普通の否定文であったのが、それだけでなく、この ‘ne + V’ にかえて加えてなおまた別の否定語を付け加えることがあった。人間の言語現象というもの、一つの語だけでいつもずっとやっておくとマンネリ化してしまつて元の効果が薄れてしまい、またもう一つ別の語を付けたい気持ちが働くようなことになってしまうものである。しかもこの ‘ne’ という否定語は極めて小さな語であった。それでであったか

注4) 以下Mod E訳はなるべくの逐語訳を著者が試みたものである。

もしれないが、別の否定語を更に付け加えることが行われたのである。一種のやはりこれは私の所謂「補強表現」である。一般に文法項目で「二重否定」(Double Negation)<sup>5)</sup>と呼ばれているものの一種である。それらの語には *na* (= *no*), *nan* (= *none*), *nænne* (= *none*), *næfre* (= *never*), *noht* (= *not*, *nought*), *nowiht* (= *not*, *nought*), *nonþing* (= *nothing*) 等がある。それらを含む用例文は次のようなものである。

- (6) a. *Ne bið hit na swa. Genesis IV*<sub>-15</sub>  
 (=It shall not be so.)
- b. *ðær næs nan wæter. Exodus VIII*<sub>-1</sub>  
 (=there was not no water.)
- c. *God soðlice ne sende nænne ren ofer eorðan: Genesis II*<sub>-5</sub>  
 (=God truly did not send no rain over the earth:)
- d. *forðan hi næfre ær swilce ne gemundon. A-S Chron. M. C. III.*  
 (=for that that they didn't never remember such before.)
- e. *Ða ondswarode he þæt he noht swylca cræfta ne cuðe. Bede's Eccl. History, LIBER III, XXIII, l. 40.*  
 (= Then answered he that he did not know nought of such crafts.)
- f. *Ne con ic noht singan; Bede's Eccl. History, LIBER III, XXV, l. 30.*  
 (=I cannot sing nothing;)

---

注5) 現代英語では所謂「二重否定」は否定と否定とが相殺して肯定になる次例のようなことの謂である。I did not see nobody in the house (=I did see somebody in the house)

そして古くは、否定と否定とが相殺するのでなく、かえって否定へと加速(補強)するだけだったのである。又否定語が、三語以上も重なることもあった、「多重否定」(Multiple Negation)とも言われる所以である。次例のようなものである。

- ..., *ne ge nan þing ne gewanian; Exodus V*<sub>-8</sub>  
 (=..., nor should you not diminish nothing;)

これら(6)の用例文中で a, b, c, d に使われている na, nan, nænne, næfre は始めに挙げた(3) a, b, c における通りに現代英語に残っているものであるが、現代英語では当然のことながらそれら各一語で否定文を作っているのである。

そして(6)の残りの e, f では 'ne' と 'noht' が共存して使われている。それをまとめてパターン化しておくとな次のようになる。

(7) S + ne + V + X + noht

そしてこの(7)のパターンでも、段々と時が経つにつれて 'ne' という否定語の方が脱落して行き 'noht' という否定語の方だけが残るようになって行ったのである。例えば次のような例である。

(8) 𐀇 ƿoƿwæthere fuhten hi noht. *A-S Chron.* M. C. XL.

(=and yet they fought noht.)

それらをまとめてパターン化すると次のようになる。

(9) S + V + X + noht

### 3. not は一体何なのか？

以上のように作られていた否定文、それが英語の当初のものであったし、またそれらの中で使われていた幾つかの否定語の中の 'noht' がそれが現代英語での普通の否定文を作る場合に使われている否定語 'not' の元なのである。この 'noht' という語が段々時が経つにつれて h が脱落して 'not' となり、現代英語に 'not' として残っているのである。

またむしろ語形的にはこの 'noht' という語はこの h が gh と綴られ、o が ou と綴られて結局 'nought' という姿で古語として現代英語にも残っている。

この 'noht' という語は場合によっては 'nowiht' とも綴られた。次の用例のようなものである。

(10) 𐀇 he nowiht fromade in his lare, *Bede's Eccl. History*, LIBER III,

III, 𐀀.46. (=and he profited nothing in his teaching.)

又同じような否定の内容を表わすには次の用例のように nan ðing 乃至は nanþing を使用することによっても行われていた。

(11) ne wyrce ge nan ðing on ðam dagum, *Exodus* XII-16

(=Don't you do no work in those days.)

この(11)の中のnan ðingは現代英語のnothingのことである。では(10)の中の一見奇妙なnowihtという語はどういう語であろうか？

この一見異様な語nowihtが時にne...owihtというように否定辞neとowihtという二語に分離して生起することがある。次の用例のようなものである。

(12) a. ne meahton heo owiht elles ondsvarian, *Bede's Eccl. History*, LIBER III, XII, l. 61.

(=they could not answer anything else.)

b. Næfre ofer þis ic owiht ma spreco oððe demo, *Bede's Eccl. History*, LIBER III, XII, l. 76.

(=Never over this I will speak or judge anything more.)

それでここまでの処でnowihtというのはne+owiht又はne...owihtのことで、意味はno+anything又はnot...anythingのことで、nowiht=nothing, noughtのことだということになる。

それでは今度は又この奇妙な語owihtとは一体何なのかということである。今すぐ上でのnowihtの実用例と分析で結局owiht=anythingだと述べた。このowihtは又awihtとも綴られるが、awihtは略音化されてauhtやahtとも書かれる。そしてそれがgh綴りとなりaughtとなったものが現代英語に古語として残っている。この第3節の初めの処で現代英語のnoughtのことに触れたが、noughtは又naughtとも書くし結局そのnaughtから否定接頭辞no-を差引いたらaughtが残り、nought=nothing, aught=anythingとなるのであるから、これはしたりと心ある人はひょっとしたら思っている筈である——それが言語愛

注6) このaについては、何故このaがそうなのかについて著者自らが語源科学をしていないので、*OED* Aughtの項での次の説明を付記し、著者自身の今後の為にも目印になるようにここ注の処に残しておく。

f OE. *á*, *ó*, ever+wiht cveature, being, wight, whit, thing; *lit.* 'e'er a whit', 'anything whatever':

そしてOEDはOFris, OS, OHG, MHG, Duとcognateだとしている。

(philology) 的感觉である。

さあこうなると  $awiht \rightarrow \begin{matrix} auht \\ aht \end{matrix} \rightarrow aught$  となって Mod Eに残った *aight* はそこで止ってしまう。即ちもう更に今度はさて *aight* は何と何に分析できるとかはできないのである。

ところが *awiht* の方はまだ探究ができるのである。*awiht* の *a*<sup>9</sup> のない *wiht* という語が稀に現われることがある。そして *wiht* は *wight* となって Mod Eにも古語として残っている語である。Mod Eに残っている語であれば先ず心強い。(更にその語の生起現象に口語、文語に不拘経験があればこの上ない。ただこの語は仲々そういうことはないであろう。)

古期英語での用例は次のようなものである。

(13) Wiht unhælo, grim ond grædig, gearo sona wæs, *Beowulf* 120~121.

(=The creature of bad health, grim and greedy, was soon ready.)

この *Wiht* はその描写の様に恐い怪物 *Grendel* のことであり、そのように *wiht* という語は先ず *creature*, *thing* のことを意味する名詞として使われた。

そしてそれが段々と否定文でよく使われ物事 (=thing) を意味する名詞・代名詞の如く使われ、遂にはそれに副詞的性質が出るようになったのである。次のような用例である。

(14) a. þær him nænig wæter wihte ne scepede, *Beowulf* 1514.

(=where no water did not injure him {anything} at all)

b. næs him wihte ðe sel. *Beowulf* 2687.

(=(it) was none the better for him at all.)

ここで生起している *wiht* は  $\sim e$  と与格乃至は助格で屈折を示している。これはこの名詞・代名詞が「傾斜」しているという文中での機能を示している現象である。即ち副詞的意味になっているということである。古英語では屈折があったので、それで諸関係を表現したが、次第に前置詞が発達して諸関係を前置詞+名詞・代名詞でやることになって行った。それで、この *wihte* もそのように表わせば *in anything* 位かと思うが慣行では *at all* とやっている。勿論副詞的に使われる *anything* だけでやってもよい。

そういうことで *wiht* の話を終る。結局 *not* のもとは *noht* であり、*noht* のもと

はnowihtであり、nowihtのもとにはne+awihtであり、awihtのもとにはa+wihtであり、wihtはcreatureとかthingであったことになる。そして結局notの源はnothing的なものであったことになる。

#### 4. 中期英語以降において

古期英語での否定文の変遷で(9)S+V+nohtとなって来ていたものが、やはり中期英語期でも受継がれ、時折nohtの綴りがnoughtにもなったりしたが、notとなって近代英語や現代英語に落着いた。一応次に中期英語での否定文をパターン化しておく。

##### (15) S+V+not+X

近代英語においても次例の通りにShakespeare等に時折そのパターンでの例が見られたりするが、今度は段々と述語動詞の前にdo+notを置く(17)のパターンへと移って現代に至っている。

(16) a. I know not seems, *Hamlet* I ii 76.

b. I heard it not: *Hamlet* I iv 5.

c. go not to Wittenberg *Hamlet* I ii 119.

##### (17) S+do+not+V+X

そしてこの助動詞‘do’の初出はMustanaja (1960)によると15cとなっているが、近代英語期の所産である。

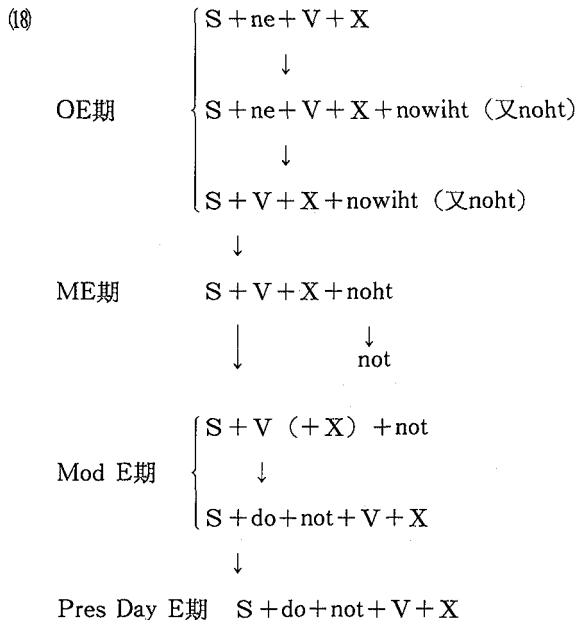
#### 5. まとめと鳥瞰

古期英語の否定文は先ずne+Vで始った。そして否定を強調するために付け加えられることがあった幾つかの別の否定語の中nowihtという語が、ne+Vと同居して行くうちに、次にはneが、余り小さな語であったためか、消失してしまい、nowihtという否定語だけが残って否定文を作るようになり、そのnowihtも段々と略音化されてnohtとなり——oとaとは可変であったが——

---

注7) この種の助動詞doの発達についてのエッセーは又稿を改めたい。そのための目印としてここに注記で留めておく。

遂には中期英語以降でnotとなって現代に至っているのである。下に鳥瞰図を示してみよう。



そして又この現代英語で使われているdo+not+Vのパターンも、don't+Vとかになったりして弱小化されてしまい、元々のnowihtの強さはない。そこで強調しようとat allとかwhateverを付け加えたりするのである。又同じようなことを繰返しているのであろう。ことばというものは面白いもので何を使っても慣れていくうちに原意は薄れて行き又新しい別のことばを使おうとするのである。

#### 参考引用書目

1. Thorpe, B. (eds, 1861) *The Anglo-Saxon Chronicle*, London
2. Miller, T. (eds, 1890) *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of The English People*, London
3. Crawford, S J (eds, 1922) *The Old English Version of the Heptateuch*, OUP.
4. 鈴木重威編 (1969) *Beowulf*, 研究社.



5. 菅沼 惇編 (1989) *GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, ME等への入門として*—大阪教育図書
6. 市河三喜編 (1986) *Hamlet*, 研究社.
7. Murray, J. A. H. et al (eds, 1970) *The Oxford English Dictionary*, Oxford.
8. Mustanoja, T. F (1985) *A Middle English Syntax*, Part I, 名著普及会.